

りまへようか、何卒、二百文の方を」

「いやよろしい、お飲り」

「有難う存じます」

呼吸もせず一口に飲みまして、

「お氣の毒で御座りますが、もう一杯」

「オ、冷でそれだけ飲みなはるお方やと、大分にやりなはるな、へい量りました、一寸待ちなはれや、お肴が無いのでお氣の毒な」

「イ、エ、もうお酒さへ頂きますれば、肴は要りまへん」

番頭は臺所から香物の刻んだのに生姜をかけて持つて來ました。

「これお食り」

「へエ大きに、御馳走になります。ア、大家さんは違ふたもんで、此の結構なお香物をば刻んで生姜をかけて……オツト勿體ない、贅澤なものだすな、私は天王寺村の百姓で大體の作物の善惡は解つてます、漬物の大根は天満大根と云ふて極つてますね、私共等の村でも大根の悪い事は御座りまへんけども、香物大根には些と六ヶ敷いので……へエ、一杯飲んで仕様む無いお話をしまして、ハ、ハ、また一杯空けました、御面倒ですがモウ一杯お分賣なさつて」

「エー、大分飲けますなア」

「へエ、もうこれで十分、へッくく、酒は憂の玉筈、氣が延びくといいたしました、有難う御座りました、勘定は何程になります」

「二百文の四杯で八百文で」

「ア、左様か、これに置きます、大きにお邪魔をいたしました」

パイと表へさして出ました。親爺は千鳥足で。

「親爺さん、足元が危なうおまつせ、氣を附けて行きなはれや」

跡に番頭が今親爺が拂ひました錢を錢箱へ投り込まうとすると、足元へさしてコトリと當る物があるので、手に取つて見ますと重い。尤も反古包の上を紙拵で括つてありますので、開けて見ますと二分銀で二十五兩。

「ア、これは大變……オ、今の親爺さんが落して行つたと見へる、後を追馳けるにも店番は無し、待てよ……考へて見ると今の親爺さんの風體から考へると、二十五兩と云ふ様な大金を持つて居る様な……見下るではないけれど人物ではなさそうな、と云ふてこんな處へ大金を放つて置く人も無し、私が得意廻りを仕てる間に若し他の人が買ひに來て落した物か、待てよ、迂濶に追馳けて行つて此の金を親爺に渡してやる譯にもいかず、考へて見ると若い者も丁稚も留守になつてる、店舗に誰